

台風9号に対する農作物の技術対策

令和7年7月31日

野菜花き課

台風第9号は、31日6時には父島の北北東約320キロをゆっくりした速さで北へ進んでいます。今後、台風の最新情報に注意するとともに、農作物や農業施設の管理について対策を徹底してください。

I 共通事項

- 1 事故防止の観点から、台風接近時のほ場見回りは避け、大雨や強風が収まってから行うこと。
- 2 局地的な大雨が予想され、ほ場が冠水する恐れもあるので、速やかに排水ができるように備えること。これまで冠浸水したことがある地域については、前例を参考にし、重点的な対応を図ること。
- 3 河川及び用水の増水並びに土砂災害の恐れがあるところでは、作業の安全確保を第一としつつ、適切に対応すること。
- 4 薬剤散布にあたっては、農薬ラベルに記載されている使用基準や注意事項を必ず守り、正しく使用すること。

II 普通作物

1 水 稲

(1) 事前対策

- ア 大雨に対応できるよう、用排水路の点検・補修整備を行う。
- イ 風雨による影響を軽減させるため、台風前は湛水状態としておく。

(2) 事後対策

- ア 特に出穂しているほ場では、白穂の発生防止や台風通過後のフェーン現象（高温・乾燥・強風）による品質低下を防ぐため、風がやむまで湛水管理とする。
- イ 冠水時や土砂が流入した場合は、速やかに排水、排出し、生育の回復を図る。
- ウ 冠水したり暴風雨を受けると、白葉枯病やいもち病が発生しやすいので、発生動向に留意し、適切な防除に努める。
- エ 出穂しているほ場で倒伏した場合は、できる限り株を引き起こし、穂が水面や田面に接触しないようにする。

2 大 豆

(1) 事前対策

水田では用排水路の点検・補修整備を行い、ほ場への水や土砂の流入を防止する。また、ほ場内に排水溝を整備するなどの対策を講じておく。

(2) 事後対策

冠水及び滞水したほ場は、速やかに排水し、根の機能回復を図る。また、風雨により茎葉が損傷たり、根腐れを引き起こすと葉焼病やべと病などの病害が発生しやすくなるため、発生動向に留意し、適切な防除に努める。

III 工芸作物

1 コンニャク

(1) 事前対策

ア 土砂の流出入防止のために排水溝の手直しを行うとともに、必要に応じて土のうなどを設置する。

イ 腐敗病や葉枯病等の罹病株は、軽微なものでも伝染源となりやすいため、あらかじめ取り除いておく。

(2) 事後対策

ア 滞水、土砂の流入があった場合は、湿害や根腐病の発生を助長するため、速やかに排水させる。

イ 強風により倒伏した場合は、早急に地上部を起こして小葉柄の反転を手直しする。その後、ただちに病害の発生を防止するため、固着性展着剤を加用したボルドー液を散布する。ただし、被害面積が大きく手直しに時間を要する場合、ボルドー液散布を優先させる。

2 タラノキ

(1) 事前対策

ア 倒伏が予想される風当たりの強いほ場では、予め杭とロープ等で固定する。

イ 土砂の流出入防止のために排水溝の手直しを行うとともに、必要に応じて土のうなどを設置する。

(2) 事後対策

ア 強風による倒伏は、新梢が屈曲しないうちにできるだけ早めに手直しする。

イ 滞水、土砂の流入があった場合は、湿害の発生を防止するため速やかに排水させる。

IV 野 菜

1 事前対策

(1) ハウスの被覆資材などで傷んでいる箇所は、風雨が吹き込まないように修復しておく。また、緩んでいるマイカー線の張り直しや基礎の杭等の補強を行う。

(2) 湿害の発生しやすいほ場では、周囲に排水溝を設け、速やかに排水できるようにしておく。また、ハウス内に雨水が流入しないように、土のう積み等の防水対策を図る。

(3) 露地野菜の支柱や誘引線、ほ場まわりの防風網はあらかじめ補強しておく。

(4) 果菜類等で収穫期に達しているものは、やや早めに収穫し、被害を最小限に抑える。

2 事後対策

(1) ハウス施設やほ場に浸水した場合は、早期に排水溝を掘り排水に努める。

(2) ハウスや防風網を点検して、損傷箇所があれば早めに補修する。

(3) 風雨による茎葉損傷、根傷み等により病害が発生しやすくなっているため、登録のある農薬による予防散布を行う。なお、農薬散布にあたっては使用基準、特に収穫前日数を必ず確認する。

(4) 天候回復後、草勢回復のために追肥や葉面散布を行う。

(5) 排水後、土壌表面が固くしまっているほ場では、土壌が乾燥して、ほ場に入ることが可能になったら、浅く中耕する。

(6) 果菜類では、被害を受けた果実を摘果し、着果負担を軽くさせて草勢回復を図る。

(7) 露地ナスなどの倒伏した果菜類の株は可能な限り起こすとともに、支柱等へ誘引を行う。また、ネギが倒伏した場合も丁寧に起こし、軟白部が曲がるのを防ぐ。

(8) 育苗中や生育中の果菜類などでは、台風通過後に天気が急激に回復すると、ハウス内が高温となるので、天窓やサイド換気を速やかに行う。また、遮光ネットを利

- 用して、強光による葉焼けを防止する。
- (9) 収穫した野菜は、傷み等がないかよく確認しながら調製作業を行い、流通中の荷傷みや腐敗の発生防止に努める。

V 果 樹

1 事前対策

- (1) 多目的防災網や防風ネットの緩んでいるワイヤーやひもは張り直し、ネットがずれたり、飛ばされないように補強する。また、防災網や防風ネットが破れている部分を補修する。
- (2) トレリスは、隅柱や中柱の横ぶれや架線の張り等を点検し、必要に応じて締め直す。
- (3) ブドウ等の雨除け施設は、ビニールが飛ばされないように補強するか、場合によっては除去する。
- (4) 幼木やわい性台リンゴ樹は、支柱や添え木を点検し、不備な場合は支柱や縄（ひも）を取り替えるなど補強を行う。
- (5) モモ等の立木性果樹では、主枝や垂主枝等の太枝が折損しないよう支柱で固定する。
- (6) 高接ぎした樹では、接いだ部分から折れやすいので添え木をする。
- (7) 園内に水が溜まらないように排水溝を掘るなど、十分な排水対策を行う。
- (8) 収穫が可能な果実については、台風接近前に収穫しておく。

2 事後対策

- (1) 果実のすり傷、葉の裂傷等から病害発生のおそれがある場合は、速やかに登録のある農薬を散布する。なお、薬剤散布にあたっては使用基準を厳守する。
- (2) 浸水、滞水している園では、速やかに排水溝を掘るなど排水に努める。
- (3) 倒伏や傾いた樹であっても、回復可能なものは出来るだけ早く起こし、盛土、支柱で固定するとともに、地下部とのバランスをとるために適宜枝の切りつめを行う。
- (4) 枝が裂けた場合は、針金、ボルト等で固定する。回復不能な場合は切り落とし、切り口に塗布剤を塗る。
- (5) 枝の損傷や落葉が甚だしい樹では、果実肥大や品質が低下するので、再度着果数の見直しを行う。
- (6) 落葉が激しい場合は、樹体への日焼けを防止するため、幹や太枝に石灰乳等の白塗剤を塗布する。
- (7) 樹勢回復のための追肥は、二次伸長、不時開花を防ぐために被害直後には行わず、礼肥の時期となってから樹勢に応じて施用する。

VI 花 き

1 事前対策

- (1) ハウスの被覆資材など傷んでいる箇所は、風雨が吹き込まないように修復しておく。また、緩んでいるマイカー線の張り直しや基礎の杭等の補強を行う。
- (2) 湿害の発生しやすいほ場では、周囲に排水溝を設け、速やかに排水できるようにしておく。また、ハウス内に雨水が流入しないように、土のう積み等の防水対策を図る。
- (3) 倒伏しやすいキク等の切り花では、十分に土寄せを行うとともに、フラワーネットや支柱を補強しておく。

2 事後対策

- (1) 冠水、浸水したほ場では、速やかな排水に努めるとともに、肥培管理を的確に行い生育の回復を図る。
- (2) ハウスや支柱等栽培施設を点検して、損傷箇所があれば早めに補修する。キクなどの電照施設においては、速やかに作動状況の点検を行い、電照処理等が確実に行われるよう確認する。
- (3) 茎葉に付着した土砂は動力噴霧機等で洗い流し生育促進を図るとともに、薬剤散布を的確に行い、病害の発生を防止する。
- (4) 切り花類等で株元が土砂で埋まって深植え状態になったものは、早期に土砂を取り除き天候の回復を待って浅く中耕する。
- (5) 切り花類の倒伏したものは、できるだけ早く起こし、茎や花穂の曲がりを防ぐ。
- (6) 枝物類・切り花類では、強風によって折損した茎葉の整理と薬剤散布を的確に行い、病害の発生を防止する。
- (7) 台風通過後は吹き返しの強風に充分注意する。
- (8) ハウス施設では、台風通過後に天気が急激に回復すると、ハウス内が高温となるので、天窓やサイド換気を速やかに行う。また、遮光カーテンの利用などにより急激な日射量の増加による葉焼けやしおれを防止する。

Ⅶ 畜 産

1 飼料作物

(1) 事前対策

- ・草地や飼料畑に水や土砂が流入する恐れがある場合は、浸水防止や排水対策を実施する。
- ・飼料イネ・飼料用米については、水稻の項を参照。

(2) 事後対策

ア 飼料用トウモロコシ

- ・ほ場に滞水している場合は、速やかに排水溝を設けて排水を行い、湿害による生育不良を最小限に食い止める。
- ・倒伏及び茎の損傷等が著しく回復が期待できない場合は、青刈り利用またはサイレージ利用とする。
- ・倒伏したものを青刈り利用する場合は、飼料給与に注意を払う。若刈りのものを一度に多量給与する事は避け、乾草等を併用しながら給与量を調節する。また、サイレージとして詰め込む場合は、発酵品質改善のために乳酸菌、糖蜜、ふすま等を添加して品質向上に努める。刈り取りに際しては、土砂等の夾雑物の混入を極力避ける。

イ ソルガム

- ・基本的にトウモロコシと同様に対応する。

ウ 牧草類

- ・台風の風による被害は比較的少ないものと考えられるが、生育が進み草丈が伸びているものは倒伏が心配される。この場合は速やかに刈り取りを行い、茎葉の汚染状況を見ながら利用する。

2 畜舎及び付属施設等

(1) 事前対策

- ・畜舎の風雨被害を防止するため、屋根や窓、入り口の点検を行い、必要があれば補修や補強等を実施する。雨や風が畜舎内に吹き込まないように戸締まりを行う。

- ・停電に備えて、必要な発電機（リース）等の手配をしておき、搾乳作業やバルククーラーの冷却、給餌・給水に支障のないように対策する。
 - ・堆肥舎やハウスかく拌処理施設への風雨被害を防止するため、施設の事前点検を実施し、窓や入り口は戸締まりを行う。雨水の施設内流入や尿汚水が流出しないよう施設及び堆肥の管理を行う。
 - ・飼料庫、農業機械・器具格納庫
風雨被害を防止するため点検を行い、必要があれば補修や補強を実施する。飼料、農業機械・器具は雨にさらされないよう管理する。
- (2) 事後対策
- ・雨が畜舎内に吹き込んだ場合は、敷料等の交換を行って畜舎内を乾燥状態に保つ。
 - ・畜舎内外の消毒を徹底し、疾病等の未然防止に努める

VIII 養 蚕

1 事前対策

蚕室は点検し、傷んでいる箇所があれば補修・補強を行い、雨や風が室内に吹き込まないように対処する。特にパイプハウス等の簡易飼育室は、風で飛ばされないよう補強を行う。

2 事後対策

- (1) 壮蚕飼育にあたっては、適正な蚕座面積、除湿、通風換気に注意し、蚕座内環境の向上に努める。
- (2) 浸水、冠水の被害を受けた場合は、速やかに排水を図るとともに、病虫害の発生原因となる冠水した条桑は伐採して廃棄する。
- (3) 桑葉が損傷した場合は、葉質が劣化しやすいため、貯桑管理に注意するとともに、1回当たりの給桑量を少なくして給桑回数を増やす。
- (4) 新植した桑の倒木は、早急に起こして根回りに土寄せして固定する。

IX 農作業安全（人の暑熱対策）

(1) 高温による影響

熱中症は以下のような症状を段階的に呈する。

分類	症 状
I 度	・めまい、失神 「立ちくらみ」の状態（熱失神とも呼ぶ）。 ・筋肉痛、筋肉の硬直 「こむら返り」のことで、その部分の痛みを伴う。 ・大量の発汗 ※すぐに涼しい場所へ移り体を冷やす、水分を与えることが必要。 誰かがそばに付き添って見守り、改善しない場合や悪化する場合は病院に搬送する。
II 度	・頭痛、気分の不快、吐き気、嘔吐、倦怠感、虚脱感 体がぐったりする、力が入らないなど。 ※自分で水分・塩分を摂れないときは、すぐに病院へ搬送する。
III 度	・意識障害、痙攣、手足の運動障害 呼び掛けや刺激への反応がない、体にガクガクと引きつけがある、まっすぐに歩けないなど。 ・高体温 体に触ると熱いという感触。 ※すぐに病院へ搬送する。

(2) 高温時の対策

ア 作業前に天気予報や自分の体調のチェックを行う。

- イ 日中の気温が高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする工夫を行う。
- ウ 作業前に充分水分を摂り、作業中は喉が渇いていなくても、水分をこまめに摂る（20 分に 1 回、コップ 1 杯以上を目安）。
- エ 電解質を含む飲み物や、塩飴・タブレットから塩分補給をする。
- オ 帽子の着用や汗を発散しやすい服装、ファン付きウェア、冷却ベスト等、身体を冷やす服装を活用する。
- カ 作業場所には日よけを設け、できるだけ日陰で作業するように努める。
- キ 屋内の作業では遮光や断熱材の施工等により作業施設内の温度が急激に上昇しないよう心掛けるとともに、風通しをよくし室内の換気に努める。また、暑さを客観的に捉えられるよう、温度計の設置や MAFF アプリによる暑さ指数の確認などを行う。
- ク 気温の状況に応じ、適度に扇風機やエアコン、ミストファンなどを使用する。
- ケ 一人作業は極力避ける。やむを得ない場合は、家族や周囲の人に作業予定を伝えておく。

※ 農林水産省ホームページ（熱中症対策）
https://www.maff.go.jp/j/seisan/sien/sizai/s_kikaika/anzen/nechu.html

※ 「MAFF アプリ」ダウンロードはこちら



X 落雷による被害の回避

雷鳴が聞こえるなど雷雲が近づく様子があるときは、落雷が差し迫っているので、速やかに安全な場所へ避難する等、雷から身を守る対策をとる。

1 安全な場所への避難

畑などの開けた場所や尾根などの高いところなどは、人に落雷しやすくなるので、できるだけ早く安全な空間に避難する。

鉄筋コンクリート建築、自動車（オープンカーは不可）の内部は比較的安全な空間である。また、木造建築の内部も基本的には安全であるが、全ての電気器具、天井・壁から 1m 以上離れれば更に安全となる。

2 近くに安全な空間が無い場合

電柱、煙突、鉄塔、建築物などの高い物体のてっぺんを 45 度以上の角度で見上げる範囲で、その物体から 4 m 以上離れたところ（保護範囲）に退避する。

〈注〉 避雷設備のないあずま屋（屋根と柱だけで壁のない建物）や掘建て小屋、テント内、高い木の近くは、かなり危険！

※ 気象庁ホームページ（落雷から身を守るためには）
<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/toppuu/thunder4-3.html>